

あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

のがある。まるで世界の「底」に触れたような気分です。発売されたばかりの短編集「父と私の桜尾通り商店街」(KADOKAWA)と「むらさきのスカート」の女(「小説トリッパー」春号)は、いずれもこの作家らしい油断のない作品です。「むらさきのスカート」の女は、かなりひねりが効いている。主人公はいかにも挙動不審。身なりにもかまわぬ変人です。語り手も距離を置く。その変人が途中からむしろふつうになる。化粧をおぼえ、仕事をサボったり上司と不倫したり。あれこれ、これでは「変人」というより「よくいる人」では?と思えてくる。ところが、これと入れ替わるように小説そのものが「愛」になってくる。今村さんの作品にしてはサービスがよくて思わず両手をあげて「あはは」と爆笑しそふになる。むしろな筋書きなのに「あーあ、おかしかった」と。でも、あちこちで「あれ?」と思う。短編集収録の「白いセーター」には、パートナーとの些細なズレからどんどん脱線し失敗していく女性の困難が描かれます。知り合いの子供を預かってハマをやったという話なのですが、子供たちのし

小説家は「変な人」が好きです。どこかに変な人はいないかなあ、と探索する人さいる。でも、これは単なる好奇心や差別とは違います。「変な人」を生み出すのは社会の構造。逸脱する人を通して、社会の裏や真相が見えてくる。すべれた作家は、そこに敏感です。もちろん「変」ならいい、というわけじゃない。これだという際立った何かがない。取り換えのきかない唯一無二。小説とは、そんな瞬間をとらえるものなのです。

今村夏子さんは「変なもの」への感性では群を抜いた作家です。文章は平易で、作品世界もふわふわした薄甘い空気に覆われる。それが、急にヒヤッとする。ゴチッとしたも



絵・片山高志

今村夏子「父と私の桜尾通り商店街」

世界全体への静かな拒絶

ぐさやセリフに無限のおもしろみもあって、困った話なのに不思議とわくわくしてしまふ。

同じ短編集の「ルルちゃん」や「せとママの誕生日」も、小さな亀裂がどんどん広がる作品。ごく小さな隙隙の話なのに、この世はいったいどうなっているの?と巨大な謎にぶち当たる。おそろしく、今村さんの文章の根底には、世界全体への静かな拒絶反応があるのかもしれない。どの作品もおつとりとやさしそふなのに、頑なでもある。

芥川賞を受賞した町屋良平さんが早々に新作を発表しました。「シヨパンゾンビ・コンテスト」(新潮)4月号。題材はビテノですが、コンクールに向けた鍛錬やこだわりがたっぷり描かれ、一種のスポ根ものとも読めます。町屋さんが面白いのは、小説を書くことへの気恥が、さきに敏感なこと。中心には「愛」をどう語るかとの難問がある。次の一節には作家の態度がよく出ています。「こんなこと、小説にしかほくはかけない。現実には、そんなこと信じてもない。しかし書く小説の世界ではきつとそれらしくりゃあ」

町屋さんは現実と虚構の間で点と点でまみります。描写に没入して読んでみると、不意に水を差すような「という書き出しを聞いて、寺田君にみ

「愛」をどう語るかとの難問

町屋良平「シヨパンゾンビ・コンテスト」

せた」と挿入があり拍子抜けする。「あれれ?そういうことなの」と戸惑う。おそろしく作品と現実を持ちつ持たれつ。両者は簡単にイコールや類似の関係にはならない。でも、意外なところをつながっていてもいいようです。

文芸誌の4月号の多くが亡くなった橋本治さんの特集を組みました。追悼文では著作物に収まらない橋本さんの人物としての魅力が語られています。「群像」掲載の絶筆「『近未来』としての平成」を読めばわかるように、この作家は何より身体性がたつぷりの「人」でした。だから、その語り口はグニユツと世界をわしづかみにする。

くしくも同誌の石橋正孝さんの「コナン・ドイル論(絵画・推理・歴史)」は、事実確認を行う「である」と、世界に働きかける「すべし」という二つのモードの違いに注目。ホームズもので面モードがどう絡み合うかを考察します。橋本さんのおもしろみも、両者の境界を自在に行き来したところにありました。

橋本さんの書く物にはつねに「文章からあふれ出す」感じがいました。評論では「合ってるか、合っていないか」が大それた言いながら、そんな場でも読者を突っつき、グニユツとつかんだ。その言葉は「行為」していったのです。

(英米文学者)